

『自然な言語習得に即した英語の指導法』

遠藤 昌一

(北海道教育大学附属旭川小学校 非常勤講師)

1. 言語は覚えるもの？身に付けるもの？

中学校・高校のときに「英語は暗記だ！」などといって勉強していた人も少なくないのではないだろうか。しかし、そのことが原因で英語が嫌いになった人がたくさんいるのも事実である。日本では他国に比べ英語を使う場面が非常に限られているがために(NIESと呼ばれる国は自国の発展に英語は必要不可欠だった)、「試験のための英語」と捉えている人も少なくないようである。

そもそも、英語とは何者だろうか。私は「英語＝言語」と常に答えるようにしている。言語である以上、言語獲得のルールを破ってしまうと学習者にはたくさんの負荷がかかってしまう。我々日本人は日本語を勉強せずに話せたり書けたりするようになっていく。英語も言語である以上、勉強(意識的な学習)をせずに身に付けることが大事ではないだろうか。

2. 「自然な言語習得に即した英語の指導法」にはどんなものがあるか？(附属小での実践より)

附属小学校では「英語の時間 教育課程」を作成し、教育課程の中で指導法として取り入れているのが「インプット理論」である。「インプット理論」は元をたどれば「Natural Approach (Krashe n & Terrell)」となる。「B-SLIM」も「Natural Approach」に入るだろう。今回は主に2つ取り上げる。

(1) インプット理論・・・Natural Approachの「インプット仮説」をもとにしている。母語習得を考えたときも、耳からのインプットが基盤となっている。

(2) TPR(Total Physical Response)・・・体(五感)を使って言語を習得する方法。

ただ、生徒・児童の負担を考える必要があり、どれか1つの指導法に特化して英語を扱うということとは避けなければならない。世の中に数多くある指導法をうまく融合した、児童・生徒の実態にふさわしい指導法を開発していくのがいいと考えている。

※ この2つの理論は「Natural Approach」に含まれる。

【実際に体験してみよう！】 英語をいながら(Natural Approach)も、体も同時に使っていく(Total Physical Response)というものです。附属旭川小学校で導入の段階で用いている、指導理論を融合した手法です。

① 名詞(物質名詞)の導入⇒apple, book, cat など

② (動作)動詞の導入 ⇒run, walk, swim, eat など

③ 肯定文・否定文の導入⇒I like carrots. / I don't like carrots. など

3. 最後に

教師が英語を完璧に言わなければならないかという問いが出たときに、私は必ず「そうする必要はないですよ」というようにしている。文法が正しくなくても言葉は通じるものである。「間違えてこそ学習」であるということを肝に銘じて英語の指導をしていきたいものである(中学校など関係なく)。